

沖縄戦後史の振れを辿る(上)

—— 独立論の底流 ——

(敬称略)

ノンフィクション作家

三山 喬

●みやま・たかし 1961年神奈川県生まれ。著書に『ホームレス歌人のいた冬』『さまよえる町』(ともに小社刊)、『夢を喰らう キネマの怪人・古海卓二』(筑摩書房)など。

見果てぬ独立の夢

事務所のドアを開けると、正面の壁に一枚の、国旗が張り付けられている。「三星天洋旗」。まだ見ぬ民主的独立国・琉球のシンボルとして、半世紀近く前に考案されたものだ。

上半分が淡い水色で下半分は群青色。沖縄の空と海を意味する二色の境目に、左から黄、赤、白の星印が並んでいる。それぞれ平和、情熱、道理を示しているという。

ここは那覇市壺屋の商店街にある雑居ビルの一室。招き入れてくれたのは、政治団体「かりゆしクラブ」

のです」

高校生時代、独立論者だった画家・山里永吉の『沖縄人の沖縄 日本は祖国に非ず』という著書に出合ったこともあり、新聞広告を見て迷うことなく参加を決断した。

このときの呼びかけ人は、琉球政府系金融機関・大衆金融公庫の元総裁という肩書きを持つ崎間敏勝や沖縄初の公認会計士・野底武彦といった人々で、事務所は那覇市内の野底の家に置かれた。屋良が最初に訪ねたとき、すでに三星天洋旗が掲げられていたという。

野底は六八年、任命制だった琉球政府のトップ・行政主席が公選制になった際、その主席選挙に単独で挑んでいる。本土復帰運動を率いる沖縄教職員会の会長・屋良朝苗が二十三万票余りを獲得し、復帰に慎重だった沖縄自民党総裁・西銘順治を打ち破った選挙だ。第三の候補、野底は激戦の狭間に埋没し、わずかに百七十九票を得ただけで終わった。

独立党設立後、七一年の参議院選挙では、知名度の高いエリートの崎間を党首・候補者に押し立てたが、このときも二千六百票余りで惨敗した。

「独立党の主張は、あの時代には早すぎて理解者はほ

の代表・屋良朝助だ。二〇〇八年までは、よりストリートに自分たちの思いを表した「琉球独立党」という党名を使っていた。

党の発足は、沖縄の本土復帰を二年後に控えた一九七〇年。当時、百貨店の新社員だった屋良は、地元に大きく掲載された新党結成の意見広告を見て、未成年ながら結党メンバーに加わったという。

「出身は米軍基地が少なかった那覇市。基地被害と言われてもピンと来ない環境だったせいもあり、本土復帰運動にはむしろ、子供時代から反発していました。小学校の先生は、生徒に日の丸を振らせ、提灯行列までやらせた。『政治運動に子供を使うのはおかしい』。僕はそう思って参加せず、『天邪鬼』と呼ばれていた

とんどいなかった。米軍の支配が嫌だから本土に復帰する。みんなそんな単純な発想で、新聞もそうでしたから、野底さんも崎間さんも、泡沫扱いしかされませんでした」

屋良によれば、党活動の実務は行動派の野底が、事実上、取り仕切っていた。屋良たち若手運動員は野底の運転する車に乗り、夜ごとポスター張りに明け暮れたという。独立党初期の活動はその後、七〇年代終盤には休止状態になるのだが、屋良自身は七二年の復帰の年、こんな「足跡」を時代に残している。

ちょうどこの一月に二十歳になった屋良は、那覇市での成人式「乗っ取り」を企てたのである。市役所に「新成人代表」として謝辞を志願して認められ、那覇市長のほか屋良朝苗主席らも列席する中で、自らの主義主張を開陳する大演説をぶつたのだ。

「侵略者である日本を祖国と教える教育は問題だ。異民族支配を許し、(本土復帰という)第三の琉球処分を許していったのは指導者の無知、無能からくるものだ……」

翌日の地元紙は、この思わぬハプニングを大きく報道した。